

大阪大学生命科学研究独立アプレントイスプログラム



夢はバラ色

仲 野 徹*

Osaka University Life Science Young Independent
Researcher Support Program

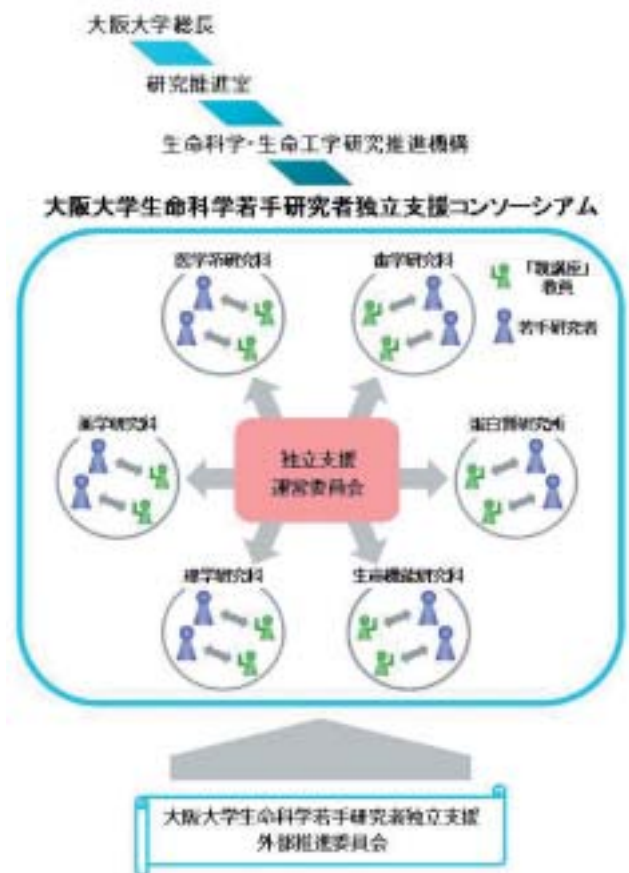
Key Words : tenure track position, associate professors,
principle investigators, life science

§ はじめに

若手研究者が自立して研究できる環境の整備を促進するため、平成 18 年度から、文部科学省科学技術振興調整費のひとつとして、「若手研究者の自立的研究環境整備促進プログラム」が開始されています。平成 20 年度までに、全 28 大学、30 件のプログラムが採択され、活動をおこなっています。大阪大学では、平成 18 年度の工学研究科「グローバル若手研究者フロンティア研究拠点」に次いで、平成 20 年度に生命科学関連 6 部局（理学研究科、医学系研究科、薬学研究科、歯学研究科、生命機能研究科、蛋白質研究所）からの提案による「生命科学研究独立アプレントイスプログラム」が採択されました。

§ 目的

生命科学分野において独創的かつチャレンジングなテーマを展開できる若手研究者を特任准教授として採用し、「独立研究アプレントイス（見習い）」と位置づけ、完全に研究室を運営できるようになるための能力の開発を、研究の独自性を担保しながら支援していくことを最大の目的にしています。そのために、アプレントイス研究者、それを個別に支援する親講座、および、両者から独立した、生命科学系教員による独立支援運営委員、からなるコンソーシアムを構築し、多角的に支援ならびに指導をおこな



っていきます（図）。このような運営形態をとることにより、独立させるが孤立させることなく、競争的ではあるが安心して研究に専念できる環境を提供していきます。

研究環境としては、既存の設備の利用から開始させますが、本提案の期間内に、完全に独立した研究環境を自ら構築できるように支援していきます。そして、最終年度の評価において十分な業績と研究室運営能力が認められた場合は、テニユアである独立准教授あるいは教授として採用する予定です。本制度により、大学院生や研究員に対して、新たな魅力あるキャリアパスを提示していくとともに、大阪大



* Toru NAKANO

1957年3月生
大阪大学医学部医学科（1981年）
現在、大阪大学大学院 生命機能研究科・
医学系研究科 教授 医学博士 病理学
TEL : 06-6879-3720
FAX : 06-6879-3729
E-mail : tnakano@patho.med.osaka-u.ac.jp

学全体へのテニュアトラック制の導入を目指していきます。

もう一つの目的としては、外国の研究機関から帰国し、我が国において新たに研究室を立ち上げたいという強い意志をもった若手研究者を優先して採用することを予定していましたが、これは、後述のように、当初予定ほどは満たせませんでした。

§ 運営と評価

有望な若手研究者の独立支援を強力に推進するものなので、小さな研究テーマに対して小ぢんまりした研究成果を出す研究者ではなく、生命科学の本命題に果敢に挑戦するような研究者を育成していくことを主眼としていきます。5年間にわたるプログラムですが、中間年度である3年目の評価において、論文発表における数値目標を設定することは、この目的に対して大きな制限をかけるものであると考え、中間評価では、論文発表ではなく、研究の進捗状況および研究室の整備状況に対して、外国人を含めた外部評価委員会と独立支援運営委員会が、責任をもって、その将来性を見極めるための「目利き」をおこなうことにしています。

5年目の最終評価は、本提案を運営する各部局におけるテニュア教授および准教授ポストの採用基準を十分に上回っているかどうか、また、十分な研究室運営能力を身につけたかどうか、などを指標に、テニュアポストの教授あるいは独立准教授として採用するかどうかを決定します。研究業績としては、インパクトファクターが10以上の雑誌における複数の論文発表を一応の基準としますが、研究の進捗状況により、当該年度に間に合わなくとも、近い将来に同等の業績をあげる見込みがある場合は、十分に勘案していきます。残念ながらテニュアポスト基準に満たない場合は、自主財源による一年間の雇用というセイフティーネットを設け、再就職のための猶予期間にしてもらう予定です。

§ 応募、選考

平成20年7月1日から8月15日までを公募期間とし、Nature誌をはじめとする国内外の雑誌、ならびにHPを通じて国際公募をおこないました。6部局それぞれに対する応募とし、重複応募も認めたため、応募総数205名、重複を除く応募者が142名

でした。うち、外国籍の応募者11名、女性研究者16名、外国からの応募者が56名でした。各部局において書類選考をおこない、33名にしばらくこみ、ヒアリング審査の結果、最終的に11名を採択いたしました。11名のうち、帰国者が3名、女性が1名となりました。残念ながら、最終段階での着任辞退などがあり、帰国者が、当初予定していた約半数よりも少なくなってしまいましたが、選考の最重要ポイントを研究業績におきましたので、やむをえなかったと考えています。

§ 「アプレンティス君」たち

申請準備の段階において、プログラムの「アプレンティス」という名称が、「見習い」を意味することから、「自立的な研究環境整備促進」にはそぐわないのではないかという理由で、一部では不評でありました。しかし、研究成果を十分にあげてきた若手研究者であっても、外部資金の獲得や、研究室の運営、あるいは、事務方との細々とした折衝など、完全に独立するために必要なノウハウを必ずしも身につけている訳ではありません。そういったところを親講座が中心となって極めて高度な指導をおこなう「見習い」として位置づければ問題はないだろう、ということで、アプレンティスプログラムとしました。ただ、英語正式名称にだけは、apprenticeは使ってくれるなということで、「Life Science Young Independent Researcher Support Program」としています。

「生命科学研究独立アプレンティスプログラムでの独立准教授」という名称は、いかにも長いので、通常の連絡などでは「アプレンティス君」と呼ぶことにしています。11名のアプレンティス君たちは、平成20年12月1日から平成21年2月1日にかけて着任し、研究室のセットアップを開始し、すでに、活発に研究活動をおこなっております。それぞれの出身、研究テーマなどは表に示してあります。選考の際にそこまで意図したわけではないのですが、全員が非常に元気あふれる若手研究者であり、多くの人が、ここへいたるまでに、流動性の高い研究者生活を送ってきています。それぞれの研究室が6部局にまたがっているため、日常的に交流するというのはやや困難なのですが、発表会などを定期的開催し、できるだけ親密な関係をとってもらおうよう心が

けています。

アプレンティス君たち(五十音順)

氏 名	所属	研 究 テ ー マ	前 職
石井浩二郎	生命	染色体高次機能の制御機構の解明	久留米大学分子生命科学研究科・講師
上田 裕紀	医学	糖尿病発症機構の解明	スタンフォード大学・研究員
加納 純子	蛋白	生命維持シグナル伝達を制御するタンパク質ネットワークの分子基盤の解明	京都大学・生命科学研究科・助教
河原 行郎	医学	microRNAの脳神経系における生理的役割の解明と神経変性疾患への応用	ウイスター研究所・研究員
木村幸太郎	理学	線虫 <i>C. elegans</i> の感覚応答行動に関する統合的研究	国立遺伝学研究所・助教
中村 渉	歯学	概日行動リズムを制御する神経回路	大阪バイオサイエンス研究所・研究員
原野 雄一	蛋白	液体論に基づいた生体分子の安定性に関する理論的研究	東京工業大学・グローバルエッジ研究院・特任助教
張 功幸	薬学	アンチジーン法の実用化に向けた機能性素材の開発	名古屋市立大学・薬学研究科・講師
藤本 仰一	理学	生命ネットワークの進化発生ダイナミクスの理論的研究	東京大学・ERATO・グループリーダー
前川 智弘	薬学	創薬を志向した有機合成反応の開発	岐阜薬科大学・講師
三間 穰治	蛋白	生体膜動態の分子機構	ダートマス大学・研究員

研究内容の詳細については、<http://apprentice.jpn.org/hp/index.html> をご覧ください。

§ 今後の展開

プログラムの目的が、若手研究者の自立的な研究環境整備促進、であることから、アプレンティス君たちが期間内に業績をあげ、テニュアポジションを獲得してくれることが、いちばんの目的であり、十分に達成してくれることと期待しています。

プログラムが採択された大学での協議会が定期的で開催されており、「日本型テニュアトラック制度」をどのように確立していくかの検討がおこなわれています。テニュア制度をうまくとりいれて、優れた若手研究者を確保することが必要である、という点

では一致しているものの、それぞれの大学の規模、地域性、などから、現状では必ずしもコンセンサスを得ることは容易ではなさそうです。我々も、工学研究科のプログラムとも綿密な連携をとりながら、大阪大学全体として、どのようなテニュアトラック制度を制定していくのか、種々の検討をおこなっています。アプレンティスプログラムを土台にして、アプレンティス君たちがバラ色の将来をつかみ取ってくれるよう、また、大阪大学に新しいバラ色の制度を確立できるよう、全力を傾注したいと考えています。